

循環的な生の在り方 ―熊井淳一と山羊―

熊井が赤城山麓の富士見町に位置するアトリエ兼住居を構えたのは1987年、49歳の時であった。以降、自然に抱かれたこの場所で生活を送っている。まず彼のアトリエを訪問する私たちを招き入れてくれるのは蜂たちだ。季節ごとの植物の蜜を吸った蜂たちの働きは豊かなハチミツを提供してくれることはもちろんだが、ミツバチの巣を形成する蜜蠟は、熊井が得意とするロストワックス鑄造の原型モデルのための素材になることもある。自然の循環のなかで営まれる熊井の生活において養蜂もその貴重な一部をなしている。

住居の隣には鑄造を行うためのアトリエがあり、その奥には庭が広がっている。庭には、熊井が家族のように共に生きる山羊たちがいる。熊井と山羊の出会いは、大学2年生の時に、彼の弟がたまたま買ってきた山羊の世話を始めたことがきっかけだった。最初に飼った山羊は前橋に移住する前に死んでしまった。本業の彫刻家の仕事に没頭すると日々の自然の変化にも気付かずに過ごしてしまうが、山羊との生活では常に季節を感じ、山羊を世話する時間には必ず戸外にいたってはならない。現在も四頭の山羊たちと暮らしている。

熊井は山羊から得られる乳をチーズにして生業にもしている。アトリエの入り口には「ギャルソンチーズ工房」という看板が掲げられ、

独学でチーズの製法を学び、フランスへも何度も足を運び、フランスで作られる山羊チーズの研究から自らのオリジナルなチーズ作りを試行錯誤しながら探求してきた。

彫刻の話に戻すと、熊井は、モデルを作ることから鑄造、そしてブロンズの仕上げまで全ての行程を自分で行う。チーズ作りも、山羊の世話から、乳を搾り、チーズを作り発酵させ、販売まで全ての行程を自ら行っている。（もちろん、それにはキルト作家である熊井夫人の支えは大きい）熊井の作品は、こうした彼自身の動植物との循環的な生き方や、素材や技術についての包括的な経験を象徴するイメージでもある。